

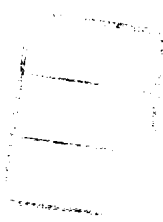
東洋文庫

54

平凡社

菅江真澄遊覽記
1

菅江真澄 著
内田武志 編
宮本常一 編訳



うちだたけし
内田武志 明治42年秋田県生，静岡県立商業学校を血友病のため退学，以後病臥生活をおくる，主編著『鹿角方言集』(刀江書院)『静岡県方言誌1・2・3』『日本星座方言資料』『菅江真澄未刊文献集1・2』(日本常民文化研究所)『松前と菅江真澄』(北方書院)，現住所 秋田市手形山崎4〜4

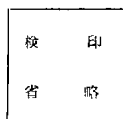
みやもとつねいち
宮本常一 明治40年山口県生，大阪天王寺師範学校卒，民俗学，日本常民文化研究所研究員，武蔵野美術大学教授，主著『瀬戸内海の研究』(未来社)『日本民衆史』(未来社)『日本の離島』(未来社)，現住所 東京都府中市新町3〜9〜12

菅江真澄遊覧記 (1) [全5巻]

東洋文庫 54

昭和40年11月10日 初版発行
昭和44年10月18日 6版発行

定価 450 円



訳者

内田武志
宮本常一

東京都千代田区四番町4番地

発行者

下中邦彦

発行所

郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京29639 株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

© 株式会社 平凡社 1965

0139-800540-7600

まえがき

宮本常一

民俗を研究する人々で「真澄遊覧記」に関心を持つものはきわめて多い。幕末のころの東北地方の常民生活を、きわめて愛情深い眼で見、体験したことを他に類例をみないほど詳細にしるしていることで、大へん教えられるところがあるからである。

ところがこの書物は、昭和二年南部関係のものが南部叢書の一冊として、またもと秋田藩校明德館におさめられたものを主に、秋田叢書別巻として六冊にまとめられ、昭和五年から八年にかけて公刊されたもののもっともまとまったものであり、そのほか柳田国男先生の校訂による「伊那の中路」「わが心」「庵の春秋」「来目路の橋」「奥の手ぶり」などが三元社から出版されており、「菅江真澄未刊文献集」

二冊が内田武志氏によって校訂編集され日本常民文化研究所で刊行されたものなどが比較的まとまったもので、いずれも刊行部数僅少なため、一般の人の眼にふれることが少なかった。

今一つこの紀行文には、あまり上手でない歌が多数に挿入されており、また晦渋な擬古文が今の人たちの感覚にあわず、かえってわずらわしい思いを抱かせたことも、この書物を取りつきにくいものにして、一般への普及をおくらせていた。

今回東洋文庫に五冊にまとめて収める「遊覧記」は、それらの和歌の多くを除き、資料として価値あるところを現代文になおし、また菅江真澄についての詳細な研究と、その足跡および著書の解説を加えて読者の理解をたすけることにした。

編訳・解説にあたった内田武志氏は昭和二十年以来、真澄の研究に全身の情熱をかたむけて来られた。そして各地に残存する真澄関係の文献資料を渉漁し検討し、まずその生涯の全貌と交友関係、秋田にお

ける晩年の社会的地位を明らかにし、単に彼が国文学者・歌人であったばかりでなく、葉草にくわしいことが、その長年の旅の支えになっていたことをも明らかにした。

真澄には「遊覧記」とよばれる旅日記七十冊のほかに、隨筆や秋田地方に関する地誌・絵画などがのこされているが、それらの著書は今回の刊行の中には含まれていない。

真澄は宝暦四年（一七五四）ごろに三河国で生まれ、若い時から旅を愛し、ほうほうに遊歴をこころみだが、天明三年（一七八三）郷里を出て、信濃・越後を経て東北の旅にのぼり、文政十二年（一八二九）に出羽国角館で長逝するまで、郷里には帰らなかった。生涯を旅に終えた人であった。したがってその生涯には多くの不明の点があり、それが人々の関心をよびもしたのであるが、内田氏はそれらの点をずいぶん克明に追及して、多くの事実を明らかにした。

そういう点で、本書は今日までの真澄研究の到達点を示すものであり、またこの「遊覧記」の刊行が、新しい研究の出発点になるものと思う。同時にこの著書が旅のあり方について読者の眼を大きくひらいてくれることになるのではないかと思っている。

真澄について研究した人たちには、真崎勇助、深沢多市、柳田国男の諸先輩があり、柳田先生によって一通りのことは分かったように思えたが、内田氏の研究はそれらをはるかにこえるものがある。それにはまた多くの方々の協力があつたことは、編者の言葉に待つとして、この出版の機会を与えて下さつた平凡社東洋文庫の方々の配慮を感謝したい。なぜなら、この書は今日まで数回も公刊を企てたことがあつたが、すべて挫折してしまつて、私など生きている間にこの書が正しく省みられることはないであろうと思つていた。それが今、本になるのである。読んで下されば多くの感銘をうけていただけると思う。

目次

まえがき

菅江真澄というひと

常冠り

故郷

旅にでる

日記

図絵

随筆

明德館本

宮本常一
一
内田武志
五

医薬

地誌

墓碑

『伊頭園茶話』

から

画像

菅江真澄年表

六

菅江真澄遊覧記

伊那の中路

わがころ

くめじの橋

秋田のかりね

小野のふるさと

外が浜風

三
美
三
九
二七
一五

けふのせば布

二七

解 説

内田武志 二〇六

伊那の中路 わがこころ

くめじの橋 秋田のかりね

小野のふるさと 外が浜風

けふのせば布 粉本稿

あとがき

内田武志

二四

旅のあと（折込み地図）

卷末

凡 例

一、かつこ内のことば

〔 〕 真澄の著書名 〈 〉 原注 () 訳注

二、本文の月日は旧暦による

三、和歌・俗謡・方言などは原文のまま

菅江真澄というひと

内田 武志

常冠り さむくても暑くても、いつも冠りものをして
 しているひとを、秋田では「じょうかぶり」とな
 っている。菅江真澄が頭巾をはなさず、だれに会
 ってもその冠りものをとらなかったで、みなが「じ
 ょうかぶりの真澄」とよんだという話が、秋田では
 いまだに記憶されている。よほど当時から評判だっ
 たとみえる。

佐竹藩の物書き役をつとめていた関兎毛が戯作し
 た「日雇ひやといばなし噺」のなかに、すでに「真澄のじょうか
 ぶり」ということばがみえている。兎毛は真澄より
 一年早く亡くなったひとだから、おそらく文化末年

(一八一七)ごろ書かれたものではなからうか。

「かねて出入のでんことて、菅江真澄にあらねども、
 夏冬に手拭じょうかぶり……」

文化八年(一八一七)の五月、南秋田郡金足村小
 泉(秋田市)の奈良家に滞在していた真澄が、秋田
 藩校明德館の指導的地位にあった那珂通博の訪問を
 うけたとき、頭巾のままでもよろしければお会いしま
 しょうといつて、初めて面談したという話も伝えら
 れている。またそのとしの七月、ながい旅の生活を
 きりあげて、久保田城下(秋田市)へ出てきた真澄
 が、通博のすすめにしたがって藩主佐竹義和と会見
 することになった。そのときも例のとおり、黒絨の
 頭巾をかぶったままだったという。こうしたことが
 あつてから、どういふ理由で真澄は頭をかくすのだ
 ろうというみんなの憶測が、はてしなく広がってい
 った。故郷で人をあやめて、自分も頭に刀傷をおっ
 て逃げてきたのだらうとか、業病で痕をかくしてい
 るのだなどという、さまざまの噂をされたらしい。

ある村の若者が好奇心のあまり、眠っている真澄に近づいて頭巾をぬがそうとして失敗した話は、そこちの村であったことのように語られているから、どうせ作り話にすぎなからう。もっとも傑作なのは、真澄が死んだとき、遺骸の頭巾をぬがしてみようとした乱暴な若者を、側にいた老人たちがおしとどめて、せっかくひとが秘密にしようとしているのを、むりにあばくのはよくないと叱ったという話さえある。ふつう世間一般の俳人宗匠のたぐいにみられる頭巾姿であつたら、こんなにみんなから異様にみられ、注目されるはずはない。いったい真澄は何をかくすために、いつからこんな頭巾をかぶることになつたのだらうか。

真澄が秋田のひとたちの意識にのぼつたのは、津軽からふたたび秋田領に入国した享和元年（一八〇一）からである。それ以前にも、天明四年（一七八四）の秋から翌年八月まで秋田を巡っているが、三十二歳の真澄の旅姿を注意したひとは、ほとんどい

なかった。そのころから頭巾をかぶっていたとはとうてい思われぬ。おそらく普通の頭髪姿であるにいたと、わたくしは想像する。それが津軽領をでた寛政十二年（一八〇〇）の冬から頭巾をかぶりだし、約三十年間、七十六歳で死去するまで、絶えず同じような黒頭巾をはなさなかったというから、それにはそれで深いわけがあつたことだったにちがいない。

真澄はまた、自分の故郷のありかをはっきりとひとに語らなかつたといわれている。ごく身近にいた友人たちにも明かさなかつたのだらうか。真澄が編んだ諸国民謡集（ひなの一曲）を譲りうけた高階貞房の子、貞臣が、その表紙裏にこう書いている。

「菅江真澄は、父貞房主の学の友たり。三河の国の人なりとも、生国をたしかに語らぬよし」

そしてまた真澄は一生涯、妻子をもとうとしなかつたので、きつと故郷でおこした女性関係のわずらわしさから、遠く陸奥に逃れてきたのだらうなどと

想像するひともしなくなかった。ともかく普通の生き方、在りようではないと、秋田の人たちには感じられていたらしいのである。これを、「常冠りの頭巾」と同じように、ひとに疑問の余地を与えて生きていくのが真澄の生活態度だと評するむきもあるが、はたしてどうだったろうか。

これから、孤独ながら自由な、そして純粋な信念をつらぬきとおして生涯を旅にすごし、当時の奥羽に比較するひともないほどの価値ある著作を数多くのこしてくれた菅江真澄について語ってみようと思う。

故郷 真澄が生まれたところは三河のどこだったか、まだはつきりわかっていない。どういう理由からか、真澄自身それを明らかに書き残してくれなかった。後年、秋田にきてからばかりでなく、旅にでた当初から、どこへいっても故郷のありかを語らなかつたようである。真澄は日記や随筆などを数多く

書いているが、その著書のどこをみても、自分の生家のありかをはっきり記したものはない。もっとも故郷や父母をなつかしく追憶した個所がいくつもあつるが、確かな地名を書いてはいない。長い旅の間には知りあつた人も多く、まず自分はどこから来たかを明らかにしてからでない、容易に会話がはじまらない場合も少なくなかつたろうと思われるのに、三河の国人であるという以上に素性をあかさうとしなかつた。しかし、どこでどういう修業をしてきた人間かを明確に語らねばならないときが、生涯のうちには必ずいくどかあつたはずである。そのようなきには、おそらく次のように答えていたのではなかつたろうか。

「三河の吉田（豊橋市）の植田うきだ義方よしえというひとから学問の手ほどきをうけた。植田家と賀茂真淵は姻戚関係にあり、同じ学統につらなる緊密な間柄であつたので、自分も義方をおして間接に賀茂真淵の学風を学んだ」

その証拠を次のように真澄自身が記してくれているから、これはほぼあやまりないところであろう。

真澄考

三河国吉田の駅なる植田義方は、もと賀茂真淵翁にまなびて、俗名は植田や七三郎とて、おのれも一たびまなびのおよとせし人なり。いといと命長き翁にて、この秋里籬嶋あきざとりのとうがかきし東海道名所図絵にも義方のところところに出たり。

これは文化二年（一八〇五）ごろ、能代港のしろに住んでいた真澄が「木曾路名所図絵」をよんだとき、そのなかに載っている植田義方の寢覚ねざめの床とこの詩をみて、この本の欄外に注記した一文である。これによって真澄と植田義方との関係も、また少年のころ真澄の住んでいたところがどこだったかも、自ずからあきらかになってしまふわけであった。

真澄が「ひとたび学びの親」としたという植田義

方は、文化三年（一八〇六）に七十三歳で没したそうだから、真澄よりちょうど二十歳ほど年長にあたっている。ここで義方について説明するまえに、真澄が旅にでてから義方とどのようにつきあっていたかのべてみることにしよう。

天明六年（一七八六）、真澄はいまの岩手県胆沢郡胆沢村の辺にきていたが、一月二十八日、平泉の毛越寺もうつの衆徒が京都にのぼる機会に、三河の植田義方あきにあてた手紙を託したと、当時の日記（「かすむ駒形」）にみえている。そしてその返事が四月二十七日に届いたと喜んでいる記事が、同年の「はしわの若葉」に出ていた。それと対応するように、いまの豊橋市小向町の植田家には、真澄から送達されたものとして、紙に包んだすすきの穂が一本あって、その紙の上書きに義方の筆で、「天明七年十一月七日、陸奥真野萱原まののかやばらの尾花、白井英二生より送り来る」とある（柳田国男著『菅江真澄』）。また同じように一枚の鳥の羽を包んだ紙には、「天明八年十一月一日

至る、白井英二贈之、松前鶴の思ひ羽」と、義方が記しているという。その後も真澄は津軽から日記の草稿などを義方に送ってみせていたそうだから、交際は最後まで続いていたものと考えられる。

次に植田家について、ここでやや詳しく説いて、そして賀茂真淵との関係にふれなければならない。そのことが、すなわち、真澄が真淵の学問にどのようになづいたかを明らかにすることになるからである。

植田家は遠江浜松藩の御用達の家柄であったが、享保十四年（一七二九）に藩主松平豊後守資訓が三河吉田藩に転封になったとき、藩主に従って吉田（豊橋市）に來住して吉田藩の御用達をつとめた。その後、松平豊後守が寛延二年（一七四九）、ふたたび浜松に転封したので、このち植田家はもはや吉田藩の御用達ではなかったらしいが、広大な土地をもつ地主として吉田宿（豊橋市）に重きをなしていたことは疑いが無い。

享保十六年（一七三一）に高須新田の堤防を築く工事を植田家が負担したので、このあたりの管理を、それまでの庄屋（小林惣右衛門）と植田が共同で行なうようになって、高須村（豊橋市小向町）に別宅をもうけて、ときどきここに来るようになった。さて享保十八年（一七三三）の春、三河の高須村の植田政元の家を訪れている。そのとき書いたという真淵の歌文には、この新築したばかりの家のありさまをよく説明してくれている。

木々はかすみ、草はみどりをふかめ、遠からぬ野路をわけて、里は高須といふにいたれば、豊川ちかくながれて、水の光りきよく、いらこが崎はるかにつづきて、よる波はみるめものどけし、しばしやすらひにとて、陰ふかきかたに立よりつれば、あるじ出むかひて、ひと間なる所にいり侍るに、窓さうじ、あらたにつくりみがき、端のかたまでも敷わたす、むしろのきらき

らしきに、おのずから心の塵ものこりなくなり
て、えもいはぬ春のながめに、あかずむかひけ
れば、あはせもの、くさぐさねもごろにきこへ
て、すがの根の長き日も覚えず、夕までにくみ
かはし……

真淵

そして、この巻軸のうらに「享保十八年丑年、三
州高須村植田政元之宅ニテ詠歌」と書き付けてある
そうである。

真澄が前掲の注記でのべた「三河国吉田の駅なる
植田義方は、もと賀茂真淵翁にまなびて……」の意
をここで説明するために、植田家と真淵との関係を
もう少しあげてみよう。

植田政元と真淵とは、ともに遠州浜松の岡部家の
出で、ごく近い姻戚関係にあった。政元は植田家に
はいってから改名して、将良、喜右衛門、また七三
郎といった。このひとが植田家の二代目である。真
澄が師事した植田義方は、吉田本町高須乗成の子で、

将良の養子となった。だから義方は、吉田の植田家
三代目である。

賀茂真淵が享保十八年に植田家を訪問したことは
さきにのべたが、その後もたびたび書簡を植田七三
郎によこしている。こうした書面から両者のあいだ
がらを察してみると、植田は真淵のよい相談相手で
あり、学びの友でもあったようで、江戸における真
淵の動静や学問の発展生長していく過程は、かなり
よく三河の植田家に伝えられていたと考えられる。

したがって真淵をとおして、ここにもたらされた図
書も多くあったろうし、植田家がこの地方の蔵書家
として知られたのも当然であった。

義方が生まれたのは、享保十九年（一七三四）と
いわれているが、植田七三郎のもとに養子となつて
きたときがはっきりしない。しかし賀茂真淵が江戸
をたつて大和へ旅行をし、いわゆる「松阪の一夜」
で有名な本居宣長と初会見した宝暦十三年（一七六
三）までには植田家にきていて、義方は往復の途次

たちよった真淵を出迎えたことであろう。そのとし、真淵は六十七歳で、義方は二十九歳かと思われる。

江戸で賀茂真淵が没したのが明和六年（一七六九）

であるから、そのとき義方は三十五歳になっており、またのちの菅江真澄は十五歳ぐらいたったと考えられる。おそらく、このころ真澄は、義方に指導されて、さかんに勉学に励んでいた時期ではなかったろうか。

義方が亡くなったとし、文化三年十二月に書かれた万年上人の追憶文によると、義方のことを次のように評している。

……天性篤実、身を治め家を治め、余波郷党まで及び、詩文和文の学を好み、そのなかにも国学を専らに樂しみけり。歌書史書類、家々の実記家集までもよく憶持し、人みな故実者と美称す。

これによっても、植田家には当時、国学などの書籍が多数所蔵されていたさまが、よくうかがい知られる。

真澄は読書ずきで、学問に精をだすとともに、少年のころから旅を好んで、そこちをあるきまわったらしい。それも目標もなく、むやみにあるいたのではなくて、由緒のある神社をおがんだり、名所旧跡などを尋ねるのがこのひとの性癖だったようである。後年に書いたものをみると、まだ童のころ、知人につれられて富士登山の帰途、古墳から曲玉まがたまが発掘されたというのをみたいと思って、甲斐の国にいったなどがある。また遠江の秋葉山に参詣にいった帰り、浜名郡中合村で曲玉を祀っている飛神の社に立ち寄って、そこに秘蔵される多数の曲玉をみせてもらったということもあった。真澄は年少のころから、すでにこのようなものに好奇心をもっていたのである。のちに「かたい袋」という随筆集に、この曲玉のことをのべて、「あが国植田なにがしの

云ふ、寄石恋 あふことをとぶ石神のつれなきにわがころのみうごきぬるかな と金葉集に見えたり。これとび神をいひたるならんと……」とあるように、植田義方から、なにかにつけて指導をうけているありさまを記していた。

真澄が少年のころから植田家に近接していたことが明らかであるから、当然その生家も近い距離にあったと考えなければならない。植田家のあった渥美郡高須村のとなり村、牟呂村字公文（豊橋市牟呂町）には、今でも白井氏が住んでいる。家紋は丸に違い鷹の羽で、これが真澄と同族の白井家ではなかったかと、わたくしは推測するのである。

やがて青年時代になると、真澄の生家は豊橋から岡崎へ移転したように考えられる。その時期はいつか、移転の動機はなにだったか、はっきりしない。

真澄の日記（「おがらの滝」の序文の終わりに、「三河の乙見なる菅江の真澄」とある。彼が三河の乙見の里の人であることを明記した例は他にもあるから、

必ずそこで生活した時期があったに相違ない。それは真澄だけが勉学のためなどで住んだのではなく、一家をあげて居住したのであろう。乙見は乙川にのぞむ岡崎あたりの古い荘名である。真澄がここを「三河国額田郡乙見莊岡崎駅」と書いている。後年の記事には岡崎について述べた個所がいくらかあるが、真澄の父親が語ったことばを次にあげてみよう。

真澄考

わが父秀順かたりて云、三河国額田郡乙見庄岡崎（不明）の北野の菅大臣ノ社は□□飛梅を内に納めて造り奉る神像たり。

（真崎勇助編『乙随筆』）

真澄が自分の家族について記した資料はあまりない。父の名を「秀順」といったのは、これ以外にないから、真崎勇助が何に拠って写したものか不審である。というのは次掲のように、真澄の日記には、

あきらかに父の名前を「秀真^{ひでまさ}」としているからである。このほうが正しいのではなからうか。

真澄が七十歳の正月をむかえたとしの日記〔笹の屋日記〕の冒頭に、家族のひとたちらしい名前を列挙したのは、珍しいことであった。文政五年（一八二二）の歳末に、真澄はしきりに故郷が思いだされて歌をよんだ。「暮れていくとしの尾張や三河路を思ひ出羽に身は老ひにけり」そして文政六年一月一日の朝、望郷の気持をおさえがたくなって、それまで秘めていた親きょうだいの名前を思わず知らず書いてしまったようである。

文政六年といふとしの正月朔日、やかの隅なるところに、しりくめ縄高く曳きはへて、みとしの御神をはじめ、黄金山^{こがねやま}ノ御神、大汝^{おおなむち}ノ御神、小彦名^{すくなひな}ノ御神、菅大臣^{ひでまさ}ノ御神、白井太夫ノ御神、またおのが父菅江秀真^{ひでまさ}ノ神靈、千枝姫ノ神靈、磐姫^{いわひめ}ノ神靈、那賀吉^{なかきち}ノ神靈、登米姫^{とめ}ノ神靈、須

波姫^{なみ}ノ神靈、……そのほか、あらゆるしたしまれむつびたりし亡霊^{みたま}どもを齋ひ奉れけることになもありける。

これによると、真澄の父の名は秀真^{ひでまさ}といった。そして、そこにあげているチエ、イワ、トメ、スワなどの女性は、あるいは母や姉妹の名前ではなからうか。那賀吉は、真澄が郷里をでるまえに亡くなったという弟の名であらう。そうとすれば、ここに兄の名が欠けているのはどうしたことだろうか。真澄は次の資料でも知られるとおり、次男ということになっているからである。

なおここで注目されるのは、菅天神と白井太夫を祀っていた事実である。真澄の家は、菅原道真の家臣白太夫の子孫だという記録が次のようにあるから、あるいは家業は神職だったのだろうか。

三河国渥美郡雲母^{あつみ}荘入文村白井某の二男菅江

真澄、菅公の家臣白太夫の末孫の由。

(石井忠行編『伊頭園茶話』)

これは真澄が晩年になって、仙北郡六郷町の竹村治左衛門に語った生家の住所と出自であった。これに記された地名は疑問が多く、真澄が生地を秘密にした証拠の一つとされている。雲母荘は吉良であれば幡豆郡でなければならぬし、また入文村も渥美郡にはないという。

むりに生家について聞きだそうとしても、真澄はいつもこのような答えしかしなかった例として、これも興味があろう。

真澄が三河にいたころの姓は白井、名は、はじめ英二で、青年になってから秀雄といった。天明三年(一七八三)に旅にでたころは白井秀雄と名のついで、寛政末年(一八〇〇)、津軽にいるころまでそうであった。ところが秋田領にきた享和初年から改名して、白井真澄となっている。その後しばらく

姓は白井、名は真澄を使っていたが、文化五年(一八〇八)になると、菅水斉と書いた例があるから、いっとき姓を「菅」としたこともあったらしい。やがて文化七年(一八一〇)の日記から菅江真澄と改姓している。そしてこの姓名を最後まで使った。

真澄の生まれた年は、いまは宝暦四年(一七五四)と推定されているが、これもはっきりした根拠があつてのことではない。文政十二年(一八二九)に没したとき、墓碑に行年を書こうとした若い友人たちが、はっきりしなくて困り、「七十六、七歳」と彫っているから、真澄は正しい年齢を誰にも教えていなかったようである。死んだのがもし数え年七十六歳ならば宝暦四年生まれであるが、あるいは宝暦三年うまれの七十七歳であつたのかもしれない。これまでに、菅江真澄の伝記を書いた加藤月蓬、村井良八、柳田国男の各氏がみな、宝暦四年生まれとしているから、わたくしもいまそれに従つておくことにする。